

早川実践の社会的意義について

2024.03.28 富樫豊

本稿では、早川氏を有形無形に応援したく、今に至る経緯と応援を前座として、早川実践の人間環境や社会における意義についてまとめることにした。

1. はじめに

早川氏の遊びを基調にした数十年間もの実践活動が富山県内はもちろんのこと全国にも遊び文化のより一層の定着を目指して頑張っておられる。まずは敬意を表したい。

我らも、そうした早川氏の実践に触発され、早川実践がより一層広まり進化することを願って、早川氏の仲間・応援者として、我らなりの役割を演じたいと考えれば、「我ら一体何ができるのか」を各位それぞれのバックボーンを活かして行動が自然と生まれてこうというものである。

そこで私は、早川実践が人間環境や社会づくりへの関与について着目し、早川実践の理屈づけを私流に行うことにした。

視点として、早川実践では単なる実践の域を超え、日常生活の営みから積み上げる社会こそが社会の健全性そのもとと解釈した。すなわち、早川氏が親子を元気し、地域を活性化し、遊びから世の中が自然と醸成されていくことこそが社会活動そのものであると考えた。

このことは、早川実践による周辺への働きかけにより、早川実践を理解・応援の方々の増加や人の輪の形成をみれば明らかであろう。また、インテリという知識人に対しても、単なる実践ではない早川実践の本質について、「なんでそのことに気かないの、自分らもよく考えてよ、子どもだって夢中になるのに」って、人を動かす熱い(早川氏)オーラーがキャッチできれば、人は自然と動くことから裏付けられよう。

以上、上述の事に鑑みて早川実践の社会的展開を展望することをもって社会的意義を明確にすることにした。なお、ここで扱う早川実践は盛りだくさんの実践の総称としていることを断っておく。

2. 応援の経緯

(1). 早川氏の母校にて出会い

建築家吉坂隆正氏設計の名建築と呼ばれた呉羽中学校校舎(1964 竣工)が 2002 年の改築決定のうきめにあったときに、保存活用運動が地元はもちろん建築系・教育系をバックに保存活用運動が沸き上がった。これに建築系の一人として私が参加した際に、地元・同窓会からは早川氏がおられ、早川氏は教育について熱く語っておられた。残念ながら、我らの運動は呉羽中学出身の行政トップに押し切られ、熱い想いが宿る学舎が壊されてしまった(2005 改築起工として取り壊し)。

(2). こども環境学会にて

それから数年後、こども環境学会大会(以後学会)名古屋大会 2008 にて早川氏と再会した。この時は子どもの健全育成として子と親の遊び実践を熱く語っておられ、会場でもおおいに遊びのイベントを繰り広げておられた。

(3). 北陸こども環境研究会にて

そうこうしているうちに、早川氏から実践を支える地元からの学術支援があれば、との熱い思いをとくと語られ、早川応援団とはいわないまでも実践家支援の旗印をもとに当初は任意団体として北陸こども環境研究会 2010 が立ち上げられた。これは後に学会地方本委員会の傘下に入り、現在も事あるごとに早川

実践が支援(応援)されている。

3. 早川氏が学術に寄せる期待

早川氏がいう学術支援は、実践の学術的な価値づけや理論構成(もあるがそうでは)ではなく、実践や理論といった枠組みを超えて学術そのものをもっと人間性を持って情熱の分かる学術であって欲しいといった想いからのものである。加えていえば、早川実践は世の中をしらずしらずに変えていく一大事業を念頭に置いたがゆえに、学術への期待が盛り上がったものである。ただし、ここでは紙面の都合上、情熱的学術の論議は避けておく。

4. 早川実践論

早川氏と行動を共にして歓談の世界に入れば自然と早川実践論(早川哲学そのもの)の世界が自然と受け入れられる。受け手側として感じたことを列挙する。

(1). 早川氏の自然体

早川氏の生き方そのものが多くの方々と共に(人間性を)楽しもうというものである。当たり前のことを(理屈無しで)心身当たり前にするのが人間。特別に主張しなくても自然と体と心が活動する、というようなオーラーが伝わってくる。オーラーをキャッチすれば、これまた自然体で反応できるから不思議である。

(2). 早川氏の理念

早川氏の数十年かけた実践から自然と培われた理念はゆるぎなく、誰に対しても分かりやすくホットなものである。以下に列挙する。

- ・遊びを基に子どもが育ち、子ども中心の社会がつくられる。
- ・単なる社会論議によるのではなく、子ども育ちの実践から社会がみえてくる。
- ・熱い情熱が推進源である。

子どもを含め(子ども中心に)父母も地域も専門家と共に自然発生的に熱く営める(実践できる)。

しかも全国から多くの仲間(共同実践・理解・応援)を引き寄せながら邁進できる。

- ・実践は着実に社会の充実に向け働きかけている。

(3). 仲間について

早川実践で仲間が続々と増えるのはなぜなのか。それは早川氏の情熱がそうさせるからである。研究支援もいいが、実践はそれらを越えて理解者増の人づくりに繋がっている。

(4). 友人としての役割

仲間として友人としてはもちろん早川実践を応援することになる。このため、早川氏が動きやすい応援環境の整備はいうに及ばず、研究に留まることなく、情熱的アプローチの体系化に向け尽力したくもなる。

5. 実践の骨子とその背後

遊びを通して人を育て、世の中のコミュニティの充実を図る(人間味あふれる健康な社会をつくる)という早川構想(早川実践)をあえて理屈付けることにする。

早川実践を展望するとその骨子は自然と浮上し、理屈付けが次のように構成できる。

- ・人を育てることが健全な生活の営みそのものである。
- ・生活の場において人を変え、地域を変え、社会を変える。
- ・理論や研究ではなく、熱い想いの実践が先行する。
- ・健全とは、自然体で共に楽しめる心身行動そのものである。

6. 世の中づくり

一般に世の中づくり(世直し)といえは社会の構成を念頭に置いているが、これとは別となる日常の市民生活の延長が社会をつくる(べき)と言いたい。この見方は、都市の自己肥大化非合理性の改善として、街(地域)の延長を都市と位置付けることであり、社会の健全化が市民の営みの健全化の積み上げを根幹論としている。

では、日常生活の中では我らは何をなすべきか。それは人間らしく五感を研ぎ澄まし、心身共に自然な行動が基になり、もちろん遊びの視点が行動の多岐に繋がるのであり、あえていうなら行動の目的化されない暗黙知ならぬ(暗黙知を含めた)暗黙動ともいえよう。

7. 実践と研究

実践と研究は共に大事なものであるが、分業化の時代においては、実践と研究があたかも独立しているかのように見え、しかも研究上位の傾向が強くなり、体系においては研究が主導で実践が後追いというように(種々の分野において)みえる。

では、子ども環境の場合にはどうか。もともと学際的な体系であることから、研究者が実践をベースにしているケースが多いが、逆に実践者が研究と共に行動という姿勢はあまりない。子ども環境の場合についても、実践側からは研究とは一線を画す場合が多々見られる。

では、なぜそのようなことが起こるのか。実践が研究とわだかまりなくリンクがどうしてもできないのか。実践側が研究にも着手するということなく、実践者がかくもこだわるのは、研究そのものの時間が取れないからではなく、現象解明や体系化という研究の範疇は実践そのものを遂行・展開するパワーにはなりにくく、実践には実践という理屈(アプローチ)で構成されるからである。

さらにいえば、研究には理性が源であり、実践には情念情熱が源である。体系(学術)においては両者がそれぞれの任を担い、相互に作用しあっている。とはいえ、実践のパイオニアワークをもっと尊重して実践先行あつての理論補強としての研究の姿もあることはいままでのまではない。

8. おわりに

本稿では、早川実践を本稿流に捉え直し、その上で社会的意義を明らかにした。

(1) 早川実践；

- ・ 実践は遊びを通して人を育て世の中のコミュニティの充実や人間味あふれる健全社会づくりと捉える。

(2) 社会的意義；

- ・ 実践は人を育て、人的環境を健全化する。
- ・ 実践は人を動かすとともに街や都市さらに社会を動かすパワーを持つ。
- ・ 日常生活の次元からの実践は社会変革にもつながる。
- ・ 実践は研究の枠にとらわれず、情熱で構成される。

(3) まとめ上げてみて；

早川氏と行動を(多少なりとも)共にしているので、早川実践の根幹を感ずるままに実践家思想を俯瞰し、実践からの理屈体系をエキセントリックに述べた。早川実践を我流で代弁させていただいた。これをもって、早川応援の一側面の構成としたい。早川氏の今後のますますのご発展を祈念して筆を置く。